

令和5年度 男女共同参画社会づくり作文コンクール



男女が互いにその人権を尊重し、責任をともに分かち合い、性別に関わりなく個性と能力を十分に発揮できる「男女共同参画社会」の実現に向けた意識を高めるため、市内の中学生を対象に、男女共同参画に関する作文を募集しましたところ、数多くの作品が寄せられました。

ここに、入賞作品をご紹介します。

作品応募総数411点

(敬称略・五十音順)

【最優秀賞】

男性の家事育児への参加について

八 尾 中学校2年 新村 眞歩

【優秀賞】

一人一人が輝く社会へ

呉 羽 中学校2年 井澤 颯太

自分らしく生きる

南 部 中学校3年 高田 紗也乃

男女平等の生活とは

南 部 中学校2年 高原 勇翔

性別と色に対する固定観念

南 部 中学校1年 山下 華穂

【佳作】

部活動で気付いた男女の固定概念

山 室 中学校2年 稲村 真美佳

多様性の理解を広める意味

山 田 中学校2年 入谷 絢華

思っていたこと

大 泉 中学校3年 大窪 礼

男女平等な社会へ

八 尾 中学校2年 金厚 結月

女らしさ・男らしさ

片山学園 中学校2年 川岸 礼奈

男性の家事育児について

八 尾 中学校3年 小峠 天人

男女以外の性について

呉 羽 中学校2年 高橋 夏音

「自分らしさ」とは？

南 部 中学校1年 土佐 桃子

生きやすい社会を目指して

山 室 中学校2年 永森 海琉

「思い込み」を無くす

八 尾 中学校2年 平山 奈津実

最優秀賞

男性の家事育児への参加について

八尾中学校2年 新村 眞歩

社会生活基本調査によると、2016年の男性の家事参加率は19.0%で、育児の参加率は24.4%です。2021年にはそれぞれ30.9%、35.4%と過去5年間の増加率が一番高い状況ですが、この割合は私が思っていたよりも低い数字でした。

私の父の日常は朝4時に起床し、まず洗濯をして、終わるまでに弁当を作ります。多いときには家族5人分もの弁当を作ります。洗濯は、夏場は3回することもあります。その他に、掃除機をかけたり、弟たちの学校の準備や連絡帳の確認をします。帰宅して夕食後は、食器の洗い物をします。休日は弟の遊びに付き合っています。私が小さい時は、おむつ交換をしたり、夜泣きがひどかったときは寝かしつけもしていたと聞いています。だから、私にとって男性が家事育児を行うことは当たり前だと思っていました。父になぜ家事育児を自主的にしてきたのか聞いてみると、「基本的に家事育児が好きで、苦にならない」と父が話していました。また、私たちはもともと四世代同居で、曾祖母、祖父、両親、私、弟二人の七人暮らしで、母は弟たちが幼い時は目が離せなくて、落ち着いて家事ができないことに加え、家族それぞれに食べ物の好みが違うため、何種類もの料理を作る必要がありました。また、休日に学習会に参加したり、子供たちを夜八時に就寝させるために、夕食分のおかずを朝作ってから仕事に行くことを心がけていたと聞き、一人で家事育児の全てを行うことは到底できなかったということでした。こうして、我が家では自然とお互いにできる家事育児はできる方がやるといった関係ができあがっていました。

私の父のように、積極的に家事育児に参加し、男性の家事育児の参加率を上げるために、例えば、学校の家庭科の授業を通してもっと家事能力を習得したり、保健の授業で育児の疑似体験をして、小さい頃から家事育児に触れる機会を増やすことが必要だと思います。

男性がさらに家事育児に参加することで、女性の負担を減らし、子育てや家事を理由に、女性が自分のやりたい仕事を諦めることなく、子育てと両立して、女性が活躍できる社会になってほしいです。

優 秀 賞 (4 点)

一人一人が輝く社会へ

呉羽中学校 2 年 井澤 颯太

日本チームの活躍に感動した昨年の男子サッカーワールドカップ。この大会の主審として史上初の女性審判が選ばれた。山下良美さんがその一人だ。先日の女子ワールドカップの開幕戦でも山下さんが主審を務めた。副審を務めた二人の日本人を含め、女子ワールドカップで日本人が主審と副審を務めるのは、初めての歴史的快挙だそうだ。

日本人であることや女性であることに壁はなかったのか。この質問に山下さんが、「私が男子の審判を始めた頃には、国内の試合でも女性用の更衣室やシャワーなども整っているし、選手やスタッフにも偏見はありませんでした。先に歩いた人たちが声を上げてきてくれたおかげです。」と答えたインタビュー記事が僕は印象に残っている。とはいえ、体格差のある男子選手を相手に堂々と判定を行うにはかなりの体力と精神力が必要だ。九十分間余裕をもって審判ができるように、毎日トレーニングや英語の勉強を欠かさないそうだ。

僕も小学生からサッカーをやっているが、女性の審判に会ったことはほとんどなく、今はまだ少ないのだと思う。今後、女性で審判を目指し海外で活躍する人が増えるなら、山下さんのような存在がその道しるべとなり、明るく道を照らしていくだろう。

僕は「社会に学ぶ『十四歳の挑戦』」で消防署に行って、何十メートルものホースを使って消火訓練を行ったり、ロープで渡過訓練をしたり貴重な体験をした。本部には女性の消防士もいらっしゃるらしいが、体力的に厳しい仕事ということもあり、女性は少ない職場だそうだ。

性別に関係なく一人一人の個性や能力を発揮して自由に職業も選べる社会がもっと広がるといいと思う。まずは男だから女だからという偏見をなくしたい。いつか男性初、女性初の快挙という言葉が聞かなくなるぐらい当たり前に個人が輝く社会になればいいと思う。

自分らしく生きる

南部中学校 3 年 高田 紗也乃

ある日学校から帰ると、小学 2 年生の妹が泣いていた。トーマスのキーホルダーを学校に持って行ったところ、クラスメイトの男の子にからかわれたらしい。「女なのに、男が付けるキーホルダー付けてる。変なの。」と笑いながら言われて、自分に自信が無くなってしまったようだった。私の妹はカッコいいものが大好きで、青色のものやズボンなどを好んで使っている。私はピンク色やスカートが好きだけど、青色のものやズボン、また、トーマスや仮面ライダーのグッズなどを身に付けている妹を見ると、この子らしくてとても似合っているな、と思う。だから、なぜ変だなんて言われるのか不思議に思った。トーマスは男が好きになるものだから、誰が決めたのだろう。自分の好きなものを、なぜ他人に否定されなければいけないのだろう。悪気は無いのだと思うけれど、そうやって悪気なく言ってしまうほど、その男の子は「男はカッコいいものが好き」で「女は可愛いものが好き」だという先入観を持っているのだ。その男の子以外にも、「男はこうあるはず」「女はこうあるはず」という先入観を持っている人は、無意識のうちに、人を男か女のどちらかに分別して、男ならこう、女ならこう、と、その人を理想像のレンズ越しに見てしまっているのだと思う。だから、妹が自分の好きなものをばかにされて傷ついたように、悪気なく「その人」自体を否定してしまい、傷つく人が出てきてしまうのだ。そのような出来事を無くすためには、性別によって人を区別し、こうあるべきだと理想を押し付けるのではなく、その人を「一人の人間」として何かの枠組みに当てはめないで見るのが大切なのだと私は思う。

最近、ニュースや新聞で「男女差別を無くそう」という取り組みがされているのを見かけることがある。けれど、昔からある、男はこうあるもの、女はこうあるもの、という先入観はまだ消えていないように思う。世の中には沢山の人がいるのだから、そのなかの男はみんなカッコいいものが好きで、女はみんな可愛いものが好きだなんてことは無いと思う。好きなものも、趣味も、全部人それぞれで、男も女も関係ないのだ。全員が、周りの視線を気にせず自分らしくいれる、生きやすい社会になることを強く願う。

男女平等の生活とは

南部中学校 2 年 高原 勇翔

祖父母の家へ行った時のことだ。祖父が祖母に「ごはんおかわり。」と言い、祖母が席を立ち祖父におかわりを渡していた。僕は、少し違和感を感じた。

僕の両親は、生まれた頃からずっと共働きである。会社員の父、介護士の母。父は、以前まで夜勤勤務もしていた。母は、朝早い時、夜遅い時、夜勤勤務と休日もバラバラの勤務体系だ。幼い時は、両親が居ない日も多く、祖母に面倒を見てもらっていた。両親の家事バランスを振り返ってみると、母が主に行っている事が多い。それでも、父は母が居ない時、夜遅い時は晩ごはんを作り、皿を洗ったり洗たくをしている。出来ることを、それぞれが協力し合って生活を支え合っている。

大工の祖父、専業主婦をしてきた祖母の家では、洗たく、料理、掃除、子育て全てを祖母がしてきたと母から聞いた。祖父が帰宅すると、お風呂が沸いていて、着替えも準備されている毎日だということも知った。母は、

「昔は、男は働きお金を稼ぐ、女は家を守るという考えがあり、祖父母には、その生活スタイルでも違和感ないんだと思うよ。共働きの多い今の時代では、協力なしに生活は成り立たない。女性が結婚し、子供を育てながら働くことは本当に大変なんだよ。だから、今から少しずつ自分の出来る手伝いを増やしてね。」

と言っていた。昔から比べると、働く女性も増え、社会的には男女平等になってきていると思うが、祖父母の様な生活では、女性の負担が増えるので、本当の意味で男女平等ではないと思う。働く条件が同じであれば、家事や子育ても同じ負担を担ってこそ平等と言えるのではないか。家事は女性が行うという考えではなく、一緒に行う。そんな考えが少しずつ広がってきたことで、僕の両親の生活があるのだろうと思った。社会全体にこの考えが浸透していったほしいと思う。そのためにも、僕自身も家事にチャレンジしていこうと思う。僕が将来結婚した時は、おたがい出来ることを協力し、助け合っていく、そんな家庭を作っていけたらいいなと思う。

性別と色に対する固定観念

南部中学校 1 年 山下 華穂

みなさんが公共トイレに入る時、男性用、女性用をどのように見分けていますか。

日本の公共トイレは、ズボンを履いた青色のピクトグラムと、スカートを履いた赤色のピクトグラムで区別されています。他にも、昔ほどではありませんが、ランドセルの色は男子は黒系、女子は赤系であることがまだ定着しています。私も以前、好きな色は黒色だと言った時に、「女の子っぽくないね。」と言われ、違和感を覚えたことがありました。このように、日本は、性別のカラーイメージが固定されている現状があります。

多くの日本人は公共トイレに入る時、ピクトグラムの形よりも、色を見て男性と女性のトイレの場所を判断しているのではないのでしょうか。ある研究結果によると、男女のトイレのピクトグラムの色を青色と赤色を逆にしたところ、日本人の大半は間違った性別のトイレに入ってしまった。ところが、海外では日本のような間違いが少なかったそうです。

私は、男は黒・青、女は赤・ピンクというような固定観念に縛られた世の中を変えていく必要があると思います。黒色のランドセルを持ちたい女子もいるだろうし、ピンク色のTシャツを着たい男子もいるでしょう。しかし今の日本は、人と違うことをしていると、批判されるのを恐れて同調せざるを得ない雰囲気があります。それは、人々の表現を制限し、自由を奪っていると言えます。そんな世の中を生きづらいと思う人は少なくありません。まず私達にできることは何なのでしょう。一人一人の思い込みや、無意識のうちにしている思考や言動に気付くこと。それが、社会の固定観念を解消していくための第一歩となるでしょう。

人々の意識が高まり、社会の固定観念が解消された時、様々な個性を認め合い、尊重し合う雰囲気が作られているはずです。そうしてやっと日本中の人々があらゆる分野で活躍できる社会が生まれ、一人一人が豊かな人生を送ることができるでしょう。そのような社会の実現を私は強く願っています。